

3.7 人名の想起障害に関する諸説¹

健常者でも高齢化に従い、しばしば人名の想起困難が起きる。しかしながら、なぜ、健常者も含めて、人名の想起困難は起きやすいのか、言語学のみならず、神経学的観点も含めた包括的な仮説はいまだ、提案されていない。次節で筆者によるモデルを提示するが、本節では人名の想起障害の文献考察を行う。

臨床的には、人名の想起困難は、一般名詞の想起困難が付随することなく、しばしば独立して現れることが報告されている (McKenna & Warrington, 1980; Sgaramella et al., 1988; Flude, 1989; Graff-Radford et al., 1990; Lucchelli & De Renzi, 1992; Shallice & Kartsounis, 1993; Carney & Temple, 1993; Cohen, 1994; Hittmair-Delazer et al., 1994; Semenza et al., 1995b; Fery et al., 1995; Fisher, 1997; Lucchelli et al., 1997; Reinkemeier et al., 1997; Papagno & Caani, 1998; Fadda, 1998; Fukatsu et al., 1999; Maki et al., 1999)。人名の想起困難を呈す症例のうち、何人かは地名の想起にも困難を示す (Semenza & Zettin, 1988 & 1989; 福原ら, 1992; Harris & Kay, 1995a & b)。

人名のみの想起困難は、person identity nodes が lemmas for peoples' names にアクセスしようとした際、その名前を“知っているような”感じを生じさせる。しかし、その lemmas は対応する phonological output lexicon を十分に活性化することができず、人名の想起困難をもたらす。一方、一般名詞の経路である semantic lexicon から phonological output lexicon へのルートは保たれ、一般名詞の想起は可能となる。

¹ 本節は、次の論文をもとにした：Kiyoshi Yasuda et al., Brain processing of Proper names, *Aphasiology*, 14, (11), 1067-1089, 2000.

逆のパターンとして、一般名詞の想起困難はあるが、人名の想起は維持されている症例もある：重症のジャーゴンにも関わらず人名の想起が維持された症例 (Semenza & Sgaramella, 1993)、人名や地名の想起が維持されている症例 (Cipolotti et al., 1993)。Sgaramella ら (1988) の症例は、歴史上の人物の名前も想起することができた。以上の症例に共通することは、人物の自伝記憶の想起は可能であることである。これは Valentine ら (1996) の人名と identity-specific semantics は別々に記憶され、人名は identity-specific semantics が活性化された後、アクセスされるという主張を支持している。

しかしながら、アルツハイマー型痴呆 (Shuren et al., 1993; Brennen et al., 1996)、あるいは自閉症 (Motttron et al., 1996) の症例は、人物の自伝記憶の想起を伴わずに、名前を想起したり、人名リストを覚えたりする。曖昧な自伝記憶でも、名前へのアクセスは可能とも思われる (Brennen et al., 1996)。あるいは identity-specific semantics を迂回して、face recognition から lexical system への直接ルートがあるかもしれない (Shuren et al., 1993)。

典型的な語想起の促通法は、名前の最初の音素を提示することである (Hanley & Cowell., 1988)。何人かの症例は最初の音素を与えられるだけで人名を取り戻すことができた (Semenza & Sgaramella., 1993)。一方、名前の語頭音の知識はあるにもかかわらず、人名が想起できない症例も存在する (Papagono & Caani., 1998)。これらの報告は、人名想起に先立ち "phonological address" による検索が行われるとの説を支持している。Butterworth (1992) は semantic lexicon の中に、それぞれの単語についての音韻的情報 (語頭音、音節の数など) を含めている。そして、これらは phonological output lexicon の中から、単語の音形を検索するために必

要としている。

前述で論じたように全失語症例は人名をよく理解することができる。一方、不思議なことに、人名の想起は脳損傷のない症例にとっても、困難な時がある。人名想起においては、その獲得時期の影響が観察されている(Shallice & Kartsounis, 1993; Reinkemier et al., 1997)。この理由について、Shallice と Kartsounis (1993)は長期間人物と名前を直接結び付けていることの困難さが、人名の想起困難の原因と説明している。しかし、名前を病前あるいは病後に覚えたものかどうかに影響されない症例もいる(Harris & Kay, 1995a)。

Brennen (1993)は、我々は新しい人間と出会う確率が高いから、人名の想起は困難であるとした。さらに、人名の想起困難を伴った症例は、同時に住所や電話番号も想起したり、覚えることができなかった(Sgaramella et al., 1988; Lucchelli & De Renzi, 1992; Harris & Kay, 1995b)。これはこの種の情報を、ある人物に恣意的に結びつけることができないためであろう(Lucchelli & De Renzi, 1992; Brennen, 1993)。対照的に、顔と名前を対にして覚えられる症例も報告されており、いずれにせよ名前が特異的に処理されている可能性は高い(Reinkemeier et al., 1997)。

漫画の登場人物名は、多少意味を付加されているにも関わらず(例：Ironbreaker—A boy with a superhuman strength)、ある症例はこのような名前を想起できなかった。固有名詞として処理されるとき、人名はもとの意味を失うのかも知れない(Ferry et al., 1995)。最近、Bredart と Valentine (1998) は漫画に出てくる名前の促通効果について、異なった結果を得ている。

固有名詞は、中間に意味を介在させない1対1の組み合わせである。この組み合わせは、従って、ある人物の想起の際、活性化する経路は1つの

みであることを意味する (Burke et al., 1991; Semenza & Sgaramella, 1993; Verstichel et al., 1996)。想起のためのただ一つの経路は、1対多数の組み合わせからなる一般名詞を思い出すことに比べれば、格段に想起を難しくさせよう (Saffran et al., 1980; Verstichel et al., 1996)。Bredart (1993)の実験は1対1仮説を支持している。

人名の想起困難は以下の損傷部位により起こるとされる：

- 1) 左基底核(扁桃核を含む) (福原ら, 1992; Hittmair-Delazer et al., 1994; Fery et al., 1995; Reinkemeier et al., 1997; Young et al., 1995)。組織的な想起を開始する能力がこれらの部位の損傷で損なわれ、時に人名の想起困難も生じるとされる。
- 2) 左視床 (Cohen et al., 1994; Lucchelli & De Renzi, 1992; Lucchelli et al., 1997)。視床損傷後には人名の想起困難の他に、人名の錯語(他の人名と置き換わる)などが出ることもある。加えて、慣れ親しんだ人物あるいは同年代の有名人についての人名の想起困難もこの部位の損傷でしばしば引き起こされる。(Choen et al., 1994; Lucchelli & De Renzi, 1992; Lucchelli et al., 1997)。これは、固有名詞が保持されている左側頭葉の不活性化 (Cohen et al., 1994) や、誤り発見のメカニズムが機能不全を起こす (Lucchelli et al., 1997)。
- 3) 左側頭極 (Damasio & Tranel, 1993; Damasio et al., 1996; Tranel et al., 1997; Fukatsu et al., 1999)。Damasioら(1993 & 1996)によると、人物のさまざまな表象は脳の広範囲な部位に分散されている。人名を想起するために、この部位はそれらの表象の仲介場所となっている。しかし、Tippettら(1996)はこの仮説に疑問を投げかけている。Semenza(1995a)は左側頭極は人名の想起に際して、多少資源

を供給しているだけであると主張している。

- 4) 左側頭葉後下部と後頭葉 (Semenza & Zettin, 1988, McKenna & Warrington, 1980; 福原ら, 1992; Reinkemeier et al., 1997)、なぜこの後部の部位が人名の想起困難をもたらすのかは、いまだ言及がない。3.4 節ではこの部位の損傷で人名の理解障害が起きることを筆者は示唆した。

まとめ

人名の想起は健常高齢者にとって、しばしば困難な時がある。人名想起が困難な理由などについて文献を考察した。最も有力な説は、1対1仮説である。固有名詞は、中間に意味を介在させない1対1の組み合わせである。これはある人物の想起の際、活性化する経路は1つのみであることを意味する。想起のためのただ一つの経路は、1対多数の組み合わせからなる一般名詞に比べれば、格段に固有名詞の想起を難しくさせる。人名の想起困難を起こす損傷部位は、左基底核、左視床、左側頭極、左側頭葉後下部と後頭葉などが報告されている。なぜこのような広範囲な部位が人名の想起困難をもたらすのか、次節で筆者の考えを述べる。